The Japan Society of Mechanical Engineers

■ 論説・随筆

技術開発精神の活性化と成仏のすすめ

Vitalizing the Spirit of Technical Developement and Approach Toward Buddha

永　野　　治
Osamu NAGANO

● 1911年10月9日生
●第45期会長
●昭和9年東京大学機械工学科卒業，20年豫備役海軍技術中佐，小松製作所技術部長経由石川島播磨副社長退任後顧問，日本原子力事業取締役，現在技術開発相談に従事
● 名誉員，正員，（自宅：〒155 東京都世田谷区代沢3-26-19）

「良識ある設計者・開発技術者が，自己の業績から受ける満足感は，作物の種子を蒔(ま)いた人が，労作の結果と自分の目的が土から生成するのを見る時の満足感以上ではないし，またあるべきでもない.」これはイゴール・シコルスキ博士の自伝「ウィングドS物語」の末尾に述べられた述懐で，かつての零戦の設計者として有名な故 堀越二郎さんが航空学会誌に感銘をこめて紹介されたものです.

技術開発精神が端的に表明されており，感じ入るばかりでしたが，この一文を読みながら、何とはなしに昔の開発体験の事などを思い浮かべるのでした.

かつて帝国海軍のジェットエンジン開発にあたった種子島グループは，昭和20年の春から夏にかけて，神奈川県秦野町の専売局煙草試験所に疎開して開発実験作業に没頭したのですが，私もその一員として参加し，計画と準備と実験と評価との繰返しに明け暮れた半年を過ごしたのです.

いわゆる24時間勤務のすがたなのですが，このような状態では意外と自由な時間が豊富にあるもので，そう言う時間はおおむね読書に利用したのです．若い仲間の芹沢良夫君が姉さんから借りて来てくれたH.G. WellsのOutline of Historyを繰返し，繰返し読んだものですが，最も強く啓蒙された部分は13世紀の先覚者ロジャー・ベーコンの説いたところです.

人間世界の諸悪は無知に因るものであり、無知の根源は，(1) 権威崇拝，(2) 習慣，(3) 群集心理，(4) 虚栄心，の四つであると指摘しているのがまことに衝撃的なくだりでありました．そして自分の目で世界を直視しなさいと説いているのですが，このことは釋尊の晩年の説法，「自からに依り，他に依る勿れ．法に依り，他に依る勿れ．自からを灯とし，法を灯とせよ」と同じ趣旨と言えましょう．ここに言う法とは，自然の理法のことであり，ベーコンの言う世界と同義でありましょう.

ベーコンの説くところは，実験科学の意義を強調したものであり，そのまま技術開発精神につながるものと言うべきでしょうが，釋尊の成仏道も，行動論理に情緒的ドライブがかかることを理性によって制御することが基本であり，そのために理性の活性化のもととなる深呼吸と冥想とを工夫しているのです.

戦時中の我々のグループの技術水準は，おおむね未開状態にあり，依存すべき技術情報も，誠に限られており，いやおうなしに自らを灯とし，法を灯とせざるを得ないすがたであったわけで，開発作業と成仏道とは渾(こん)然と一体化した姿であったと言えましょう.

今日の我々は，文字どおり日進月歩の科学技術情報を豊かに採り入れることが出来，随分と良い環境に恵まれているように見えますが，もう一歩踏み込んだ境地を拓こうとすれば，意外に頼れるものは限られており，「我等の知るところ全たからず，我等の預言も全たからず，全たきものの来たらん時は，全たからざるものは廃たらん」（新

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Mechanical Engineers

約・コリント前書・13章）と言うパウロの言葉をそのままに思い知らされるのです．

仏法に“如実知見”と言う言葉があり，これはそのまま科学的精神に通ずるものと言えましょうが，現実世界に包蔵される諸々の虚妄にとらわれることのないことが，技術開発には特に緊要でありましょう．

ところで技術進歩の歴史をふり返って見ると，成仏指向に矛盾するような点にも気が付きます．近代科学技術の進歩が，戦闘手段開発指向のドライブに依存するところが大きいことと，情緒的チャレンジが学理に先行する場合が多いことです．よく言われる逆説的警句に，「空気力学が航空機の進歩を促したことよりも，航空機が空気力学の進歩を導いたことのほうが大きい」と言った具合です．

人間の殊勝な思惑や期待が裏切られた興趣に富む話があります．動力飛行の先駆者オーヴィル・ライトが1917年に次のようなことを書いています．「我々兄弟が初めて人を乗せる飛行機を作り，そして飛んだ時に，我々は戦争と言うものを実際上不可能にするような発明を世に贈っているのだと思った．」かつての戦争では敵状偵察のための斥候活動が死命を制する程の重要性をもっていたので，空から布陣を一望出来ることになれば，戦闘は成り立つまいと思うのは，いかにも自然な論理なのですが，歴史の展開と言うものは，まことに端倪すべからざるものがあり，程なく勃発した一次大戦では航空機の導入が戦況をますます派手に広域化し，今もそのすう勢は続いているのです．

人間の理性がいかにも頼りないことを象徴するような話ですが，それなればこそ如実知見の叡知に向かう成仏がいっそう重要なのです．

生物の歴史の中で行動論理として働いて来たものは，まず感覚であり，やがて温血動物が現れるに及んで情緒が発達し，直立手作業を足場に未曽有の発展を進める作業能力に見合って発達した人類の理性は，一見同じく未曽有のものには違いありませんが，人類の作業能力の進歩は進化論的速度を隔絶した速さで進んでおり，近代化四世紀のそれは，まさに指数関数的な様相を示すものであり，高度の組織的思考活動なしには対処は不可能で，ここに人類すべてにわたって成仏が要請される事態に立ち到ったと思われます．

ウェルズが皮肉な論調で指摘しているように，現在でもほとんどの人々は空想と激情によってのみ行動しているからです．

感覚や情緒など原始的行動論理は，身のまわりの事物にのみ対応すべきものであり，人間世界に育つ巨大な作業能力に見合うべきものではありません．

逆に身のまわりの反応行動の迅速的確さを比較すれば，感覚によって直接行動制御を遂行する昆虫類には到底及びもつかないものです．

人間集団の驚異的能力増大の反面に，このような行動生理学的退化が伴うのも，進化論的適応の現実なのでしょう．

中世の近代化はイスラムの風土の中で興り，やがて17世紀以降の急進歩はキリスト教の風土にあらわれたのですが，宿命論をその基盤にもっているこれら宗教の哲理のもとでは，もはや対処出来ない事態に立ち到りつつあると思われます．理性を基盤とした因果律的世界観，虚なるものに惑わされない如実知見の精神活動によってのみ文明世界の進展に体系的な対処が出来るのであり，まさに釋尊の説法にぴったりする成仏指向の世の中が2500年後に到来したのです．

それでは成仏ないしは理性の活性化はいかにして達成すべきでしょうか。

6年間にわたる釋尊みずからの人体実験に裏付けられる精神活性化の処方は今でも通用するはずです．それは極めて素朴な原理，大脳に十分量の酸素を供給することと，強化思考実験練成による大脳機能の改良です．つまりは深呼吸と冥想です．

近代の生理学は脳細胞はかなり早期から衰滅を始めることを見付けていますが，これはエネルギー資源多消費形のハードウェアについての現実であり，論理機能のソフトウェアを形成する脳神経細胞の突起シナプスについては，その実体がミクロの中でのミクロで，一見老化の過程にある人でも創成を続け得るもののようです．

時期を問わず，成仏は可能なのです．

（原稿受付　昭和62年6月8日）

NII-Electronic Library Service